
透析専門介護・医療施設における腰痛のリスクアセスメント

社会福祉法人照善会 こくら庵

医療法人衆和会 長崎腎病院

○小森優也 福本 駿 東村清貴 小島千佳子 小松利恵子 林 涼子 上谷しのぶ 船越 哲

【目的】

介護・看護労働者の就業起因の腰痛は深刻であり、職員の身体的、心理的負担を考えると、こうした状態を改善する事が急務である。今回、リスクアセスメントの視点から検討するために当施設における腰痛の実態を調査した。

【対象】

当法人の介護職 21 名、看護職・ME154 名に記名式のアンケートを行った。

【結果】

腰痛保有率は介護職で 71.4%、看護職・ME で 75.0%と、一般病院の平均 65%を上回る状況であった。痛みの頻度は介護施設と透析スタッフで「ほぼ毎日」であり、自覚する要因では「不自然な姿勢」が 54%と、「力仕事」の 44%を上回っていた。このような腰痛の対策としては、介護・医療施設で 3 割が腰痛ベルトや腰痛体操を実行していた。

【考案】

透析関連施設では、スタッフ側の要因として中腰の穿刺作業や止血業務、患者側の要因としては身体能力が低下しスタッフへの負担が増大したための腰痛が推定された。腰痛の原因となっている業務をさらに詳しく洗い出し、スタッフ安全配慮義務の観点からも抜本的で継続的な腰痛予防は急務と考える。